

南方（フィリピン）

ルソン島、アバリ、旅団砲兵奮戦

記

福岡県 大坪 光二

昭和十五年二月二十日久留米野砲兵第二十四連隊に入隊、そのまま内地勤務四年、その内の十カ月は熊本
の独立混成第三十二旅団砲兵教育隊に配属勤務しました。

昭和十九年一月十日動員下令とともに門司港を出港、フィリピンに向け出発する予定でしたが、戦況の変化により予定を変更、仏印のサイゴンに向かうことになりました。

航海は夜間航行で敵潜、上空を厳戒しつつ無事サイゴンに到着上陸することができました。そこに通過部隊として三ヵ月滞在し、五月にサイゴンを出港、フィリピンのマニラに上陸、陸路を行軍によりアバリという所に到達した。

米軍はアバリに上陸するという予想があったので、部隊はそれから一〇キロ位後方の山の中に入って陣地を構築した。その時の装備は野砲三門であった。敵の上陸部隊を迎撃すべく待っていたが、米軍はリンガエ湾に大挙上陸したのである。

戦闘部隊応援のため陣地を捨てて移動を開始したが、昼間は敵機の銃撃で動けないので夜間行動によって野砲を水牛や馬に挽かせて目的地向かった。しかし、何しろ川という川、谷という谷、すべて橋を破壊

されて渡ることができないので、谷に降りてまた攀じ登る。砲はロープを付け人力で引き上げる。敵よりも自然との死闘である。また、川を渡るのにも大変な苦勞をしました。ヘトヘトに疲れた身体に鞭打って前進しているとき、敵の三個師団位の兵力が戦車、重砲部隊を混じえて北上しているのを望見しました。

私達の前方七、八キロ位の所を友軍の一〇センチ榴弾砲部隊が移動していましたが、それが最初に敵との遭遇でした。その戦況は昼間でしたから良くわかりました。一〇センチ榴弾砲部隊は砲陣をつくり一斉に砲門を開き猛射しますが、空からの攻撃、地上からの圧倒的に優勢な重火器による敵の攻撃にみるみる苦戦となり、敗勢は目に見えてきた。

中隊長は味方の苦境にいたたまれず、「応援に行こう」と私に何度も同意を求めてきたが、何しろジャングルを一步出たら上空に乱舞する敵機の餌食となることは確実である。心を鬼にしてこれに応じなかった。

この時程制空権の喪失を無念に思ったことはない。目前に味方の危急を見ながら手が出せない、救援に行け

ない、これ位口惜しいことはない。

空爆も銃声もやみ、夜となり闇が一時の静寂を得た戦場を覆った。小高い丘の上に登って見ると米軍は電灯を煌々とつけて野営をしているではありませんか。将校は中尉の中隊長独りであり、曹長の私と協議して、一門につき四五発の保有弾三門で一三五発の全弾を、油断しきった敵の野営陣地に叩き込んでやることに一決した。

ジャングルから出て三門の砲列を布いた。装弾、狙いすまして一斉に発射、一大音響と共に七・五ミリの野砲弾は敵陣に的確に飛び込み、赤い光と共に炸裂する。次から次へと、射って射って射ちまくる。

最後の一発で砲身を破壊してジャングルの奥へと速やかに退避する。残存兵力一二〇名の半数に小銃があり榴弾は全員に一個ずつあるだけで丸腰同然となった。とにかく、南に向かって行けとの命令であったので、ジャングルを切り開いて南へ南へと進んだ。何日も何日も同じことの繰り返しで疲労は極度に達した。

マラリヤ患者が続出、赤痢患者は出る、惨憺たる有

様である、自決するもの、病死するもの、隊員は遂に九〇名位になってしまった。広闊の地があれば野営して身体を休めるのだが、ほとんどジャングル生活が続いた。

彷徨生活の中で銃声も熄み、飛行機の爆音もなく、何日か静かになり異様に静かな空気を感じた。不思議に思っていると、九月になってからと思いますが、飛行機からピラを撒いてきた、その伝単には「戦争は終わった、平和になったのだ、ジャングルから出て来なさい」と書いてあった。

我々は半信半疑で最初は信用しなかったが、旅団本部から連絡将校が来て初めて終戦の事実を知らされたのである。

部隊はマニラに集結することとなり行軍を続けたが、途中住民から石を投げ付けられたり、牛の糞をぶつけられたりする中を、病人はタンカに乗せて運びました。さてマニラに着いたが、服はボロボロ、足は素足であり、靴などはとうの昔にありませんでした。その後靴や服を米軍から支給して貰い捕虜収容所に入り

ました。

ところが収容所の生活は三度三度の食事は湯呑み一杯位の粥とバターを小匙一杯位で、とても粗末なものでした。下士官以下は毎日使役に出て米軍の宿舎の掃除その他雑多の仕事であった。夜となって寝るだけが楽しみの毎日が続きました。

ようやく祖国に帰れるようになり我々は海防艦に乗り込み、昭和二十年十二月二十日宇品に上陸し復員することができた。思えば、フィリピンでの戦闘は強力な米軍に圧倒され続けたが、三門の野砲での最後の砲撃はせめてもの日本砲兵の意地でした。多くの戦友がまだにあの奥深いジャングルの中に眠っていることを思うと、痛恨の念に耐えず、唯々御冥福を祈るのみです。